

# 追悼記事

野口芳子

(武庫川女子大学)



2006年6月12日にイングリット・アーレント＝シュルテ女史(享年64)が亡くなられた。6月20日にケルン市の墓地で埋葬式が執り行われた。死因は肝臓癌である。

アーレント＝シュルテ女史は2004年9月11日、武庫川女子大学で開催された日本ジェンダー学会第8回大会「魔女とジェンダー」で基調講演をするため来日された。魔女狩りの被害者に焦点を当てた画期的な研究が評価され、国際交流基金海外研究者招聘プログラムで日本に招待され、3週間関西に滞在された。その間、日本ジェンダー学会、阪神ドイツ文学会、日独協会、武庫川女子大学、甲南大学などの諸機関で講演され、その活躍が新聞各紙で報じられた。

「なぜ女性が魔女として焼き殺されたのか—16・17世紀ドイツにおける魔女裁判—」という題で行われたジェンダー学会の基調講演は、斬新で格調が高く、弱者への暖かい視点に満ち溢れたものであった。その内容は全文が和訳されて『日本ジェンダー研究』第8号(2005年)67-73頁に収められている。

イングリット・アーレント＝シュルテ女史は、1942年4月1日に生まれ、ギムナジウム(中・高校学校)教諭を経て、1996年にカッセル大学史学部で文学博士号を取得された。1994年以降ケルン市に在住し、非常勤講師として大学や西ドイツラジオ放送局などで働きながらフリーの歴史家として学際的魔女研究会を設立し、ジェンダーの視点から魔女狩りを考察する必要性を説き、積極的に活動された。また、ドイツ各地で魔女展の企画に力を注ぎ、魔女裁判がジェンダー問題であることを生涯をかけて訴えられた。

彼女の博士論文は、野口芳子著『グリム童話と魔女—魔女裁判とジェンダーの視点から』(勁草書房2002年)の第Ⅱ部第3章「魔女狩りの犠牲者」にその骨子が紹介されている。

ホルン市の裁判資料を丁寧に掘り起こしながら、16世紀後半から17世紀にかけてドイツ小都市で処刑された魔女被疑者の姿を鮮明に浮かび上がらせた優れた論文だ。裁判記録は公式記録(研究者は通常これを使用)ではなく、書記が口述速記した全記録を使用している。当然、標準ドイツ語ではなく中世の低地ドイツ語の方言で書かれたものである。それを読み解けたのは彼女が、歴史学だけでなく言語学にも造詣が深く、また同じ地方の出身者なので方言が理解できたからである。10年以上もかけて読み解きながら書かれた博士論文には、被告人の実態が鮮明に描き出されている。2人の子育てを終えてから取り組んだ彼女の博士論文は、地位や名誉のためでなく、魔女狩りの実態を公表することが女性としての義務であるという熱い思いに突き動かされたものである。

彼女は多くの本や論文を書いているが、日本語に訳されているのは、『魔女にされた女性たち』(野口・小山訳 勁草書房2003年)である。この本には魔女狩りの被害者の姿が実名入りで克明

に描き出されている。

アーレントさんが来日されたとき、車で上高地と白骨温泉に案内した。日本の自然美と温泉文化を知ってほしかったからだ。白骨温泉の宿の露天風呂は、女湯が極端に狭く、男湯が10倍も広かった。憤慨した私たちは誰もいないときに男湯に浸かりに行った。男性客がやってきたが、女3人がドイツ語で話しながら湯に浸かっているのを見て、大慌てで逃げて行った。アーレントさんと私と小山さんは大声で笑ってドイツ語で勝どきの声をあげた。旅の会話はドイツ語で通したが、日本食や日本文化に深く感動したアーレントさんは、日本が大好きになられた。豆腐をおいしそうに食べる彼女の姿が今でも目に浮かんでくる。なぜ、こんなに早く逝ってしまわれたのか、悔やまれてならない。

8月2日に小山さんと二人でケルンへ墓参に行く。ご冥福を祈り黙祷を捧げる。